

○「心の支えとなった本16選」(15)

古田求『バルトの楽園(がくえん)』(潮出版社2006年)

教養教育院教授 石川榮作

徳島大学に勤務して39年間のうちに出会ったライフワークの研究については、前回述べたが、地域貢献の点で生涯のテーマとなったものもある。学部長を務めているときに総合科学部内に発足したモラエス研究会での活動もその一つであるが、もう一つ重要なものは大正時代に現在の鳴門市大麻町板東にあった板東俘虜収容所に関する活動である。

板東俘虜収容所は第一次世界大戦中、中国の青島(チンタオ)で日本軍に敗れたドイツ兵たちが俘虜として収容された収容所の一つであり、ほかの収容所とは異なって松江豊寿(とよひさ)所長の寛大な取り計らいによってドイツ俘虜たちは比較的自由な生活を送ることができ、さまざまな文化活動を通して、わずか2年10か月のうちに見事な「ドイツ文化」の花を咲かせた。1918年6月1日には収容所内でベートーヴェンの第九交響曲を合唱付きで演奏した。それが日本での「第九」初演であり、それが縁で始まった日独交流は現在も続いている。

この板東俘虜収容所での「第九」初演を題材として2006年には東映映画『バルトの楽園(がくえん)』が製作・公開された。そのときの映画シナリオを脚本家自らの手によってノベライズ化されたのが標題の本である。この映画製作の準備が進められている頃には、チーフプロデューサーの野口正敏氏から日本語の企画書をドイツ語に翻訳することを依頼されて、同僚のヘルベルト先生と一緒に企画書翻訳に携わったことがあるので、それだけにこの映画およびノベライズは私にとっては生涯忘れられないものとなっている。「心の支えとなった」というより「心の支えとなっている」ものと言ってよいであろう。事あるごとにこの映画をDVDで観たり、ノベライズを読んだりして、感動を新たにしている。

2014年は中国の青島で敗れた約4700名のドイツ俘虜たちが日本に移送されてからちょうど100周年の年でもあったことから、2014年度の徳島大学ギャラリー新蔵展示室では『板東俘虜収容所「第九」展示会』を開催し、その一環事業として11月26日には上記の野口正敏氏をお呼びして、その映画解説並びに映画上映会を行った。その映画解説の中で野口氏は脚本家の古田求氏がシナリオを書いているときの話に触れられた。それによると、「この映画はヒーロー物語ではなく、言葉や習慣、文化の異なるドイツ俘虜たちと板東の地元民との人間交流が、現代に何を残しているのかという、名もなき庶民主役の映画を創ろう」というコンセプトで意見が一致し、出目昌伸監督も「松江所長物語になるのではなく、国境や境遇を超えた人間愛と、戦争の愚かさを伝えて、戦争やテロがなおも続く現在、友好と平和をこの徳島から発信したい」と述べられたという。この映画解説を聞いて、私は改めてこの映画のすばらしさに気がつき、感動せずにはいられなかった。「庶民主役」の映画と言えば、この映画の最終場面で展開される「第九」演奏シーンの撮影日の2日目は、徳島で何十年ぶりかの大雪で、撮影できるか危ぶまれたのであるが、そのとき地元民が雪かきの作業を手伝って、そのおかげで撮影が無事終了したという。その意味においてもこの映画は板東の「地元民主役」の映画であると言ってよいであろう。板東俘虜収容所時代さながらに、映画スタッフと地元民との「心の交流」が展開された映画であると評価できよう。

この映画解説と映画上映会のほかに、同年の11月2日には福島県白河市での「福島原発災害復興支援」の一環事業として東映映画『バルトの楽園(がくえん)』上映会を行うとともに、11月9日には放送大学徳島学習センターでの面接授業「徳島の偉人に学ぶ」において松江豊寿所長を取り扱ったことから、その頃はちょうどよい機会だと思ってかなり詳しく松江豊寿について調べてみた。ドイツ俘虜たちが板東俘虜収容所で比較的自由な生活を送ることができたのも、松江豊寿所長の「寛大な心」のおかげであるが、その「寛大な心」はどこから来るのか。それが主な関心事であった。

板東俘虜収容所の研究者なら誰もが指摘するように、松江豊寿所長の「寛大な心」は、彼が元会津藩士の息子であり、「斗南(となみ)」の末裔(まつえい)であることに由来することは、確かであろう。もちろん「斗南」の末裔だから、苗字が「松江(まつえ)」というわけではないが、周知のとおり、会津藩は戊辰戦争で最後まで幕府側につき、大勢の薩長軍が攻め寄せ中、女性も子供も含めて5千人足らずで鶴ヶ城に立て籠もって猛攻に耐えた。しかし、1か月後には落城して、その後、北の果てにある斗南に追いやられて、そこで厳しい生活を強いら

れたのである。映画ではその場面が松江所長の回想のかたちで展開されている。松江所長の父久平もその辛酸をなめた会津人の一人であり、松江豊寿は父や周囲の人たちからそのときの話を聞いているうちに、彼の心の中には「敗者あるいは弱者へのいたわり」の気持ちが自然と生まれてきたのであろう。その後、彼は軍人となり、1904年に韓国駐劄(ちゅうさつ)軍副官を命ぜられたとき、司令官長谷川好道が反抗的な韓国人を虫けらのように取り扱う無謀なやり方にはかなりの反発を感じていたという。そのような韓国での体験から、のち1914年には徳島俘虜収容所、そして1917年には板東俘虜収容所の所長に就任したときには、持って生まれた「敗者あるいは弱者へのいたわり」を見せて、「彼らも祖国のために戦ったのだから」という言葉を口癖にして、ドイツ俘虜たちを人道的に取り扱ったのである。彼はドイツ俘虜たちが収容所に入った初日に、「私の考えは博愛と人道の精神と武士の情けをもって諸君に接することである」ということを述べている。この「武士の情け」によってドイツ俘虜たちは収容所でありながら、かなり自由な生活をするのができ、さまざまな文化活動に励むだけでなく、地元民たちとも積極的に交流して、そこに「ドイツ文化」を残していき、それが現在に至るまで続いているのである。

この松江豊寿所長の生涯を勉強することで、私は確実に学び取ったことがある。それは、社会が急激に変貌を遂げて行く中でさまざまな問題が山積する現代社会にあって、私たちに最も大切なのは、松江所長が持ち合わせていた「武士の情け」、表現が古めかしければ、「敗者あるいは弱者へのいたわり」であるということである。「寛大な心」「寛容な心」と言ってもよいかもしれない。2009(平成21)年4月から総合科学部の学部長を務めているときにも、その4年間つくづく感じたことであるが、現代社会においてリーダーシップを取る者に求められているのは、いかなる意見をも素直に受け入れて、それをできるだけ役立てようと努める「寛容な心」あるいは「広い心」、別の言い方をすれば、「包容力」ではあるまいか。私たちが学問に励み、読書に親しむのも、その行きつくところはこの「包容力」であると思う。教養とは決して「知識」だけのことではなく、さらにその知識を超えたところで何事にも柔軟に対応できる「寛容な心」「広い心」、つまりは「包容力」を具えていることである。このような境地に辿り着くことができたのも、東映映画『バルトの楽園(がくえん)』および標題のそのノベライズ化された本に出会ったからである。その意味においても標題の本は「心の支えとなった」というより、これからも「心の支えとなる」本である。

[メールマガジン「すだち」第143号本文へ戻る](#)

【すだち】徳島大学附属図書館報 第143号

〔発行〕国立大学法人 徳島大学附属図書館

Copyright (C) 国立大学法人 徳島大学附属図書館

本メールマガジンについて、一切の無断転載を禁止します
